

新刊紹介



戸木田嘉久著

21世紀の労働運動を考える基礎学習文献 「労働組合の原点」

著者の前書きにあるとおり本書は「労働運動」誌に99年のほぼ1年にわたり連載された「入門講座＝労働組合——過去・現在・未来」に大幅な加筆・改訂・補強とともにおおくの注釈と資料や写真を加えて一冊にまとめられたものである。連載の表題からもわかるように本書が科学的社会主義の労働組合論であるマルクスの「労働組合——その過去・現在・未来」(巻末にその全文が掲載されているが本書ではわずか2ページ)をテキストとしつつ、日本の労働組合運動の歴史と現状を簡潔に要約しつつそのさらなる発展方向の検討にあてられている。

内容は序章の「いまなぜ、古典から労働組合論を学ぶのか」から第10章の「日本の労働組合——その現在・未来」までマルクスとともにエンゲルス・レーニンなどによる労働組合論が豊富に引用され科学的社会主義にもとづく合法的発展が解明されが、その内容は第1章から第8章までに適切で簡潔な表題で区分され展開される。とりわけ第5章制度的要求闘争、第7章経済闘争と政治闘争は今日の日本の労働組合運動との関連で深く読み取るべき内容である。

日本の労働組合の過去・現在・未来を論じる第9章・第10章は筆者が1940年代後半から民間研究機関や大学の研究者として活躍しつつ、つい最近まで労働総研代表理事として三井三池大争議や国鉄分割民営化など日本の労働組合運動が直面した重要問題と直接・間接にかかわり、たたかう労働者を支援するために奮闘してきた立場からの経験と教訓が生かされている。

現在、日本の労働組合は組織率低下や青年層の組合離れとともに社会的影響力の希薄化など重大な問題に直面しているが、市場原理至上主義による独占

資本と追従する政治の攻撃の結果にほかならない。しかし、急速に進む労働者の労働と生活悪化は職場・地域とともに労働戦線の枠を越えた要求実現の運動に変化をもたらしている。

日本の労働組合運動の転換期である21世紀初頭にあたり、本書が主題とする科学的社会主義にもとづく労働組合論が幹部活動家の理論学習とともに、青年層の基礎学習にも活用することができるだろう。日本における強力な労働組合運動再構築の土台造りとなる学習テキストとしての購読と活用を期待したい。

(草島和幸・くさじま かずゆき・労働総研事務局長)

浅井春夫著

「新自由主義と非福祉国家への道 社会福祉基礎構造改革のねらいとゆくえ」

政府は今年に入って相次いで、社会保障制度の今後の在り方についてまとめ発表している。7月には税制調査会「中間答申」で財政の在り方を、9月には社会保障制度審議会「新しい世紀に向けた社会保障(意見書)」、10月には「21世紀の社会保障構造の在り方を考える有識者会議『21世紀に向けての社会保障(案)』」では、国民の給付抑制と負担増を押しつけ、一方で国庫負担の削減と規制緩和による市場化路線を打ち出している。

このように、政府は21世紀を前に社会保障の構造的再編の方向をあらゆる機会をとらえて打ち出している。そして国会では、審議と与党の数の力でごり押しし、国民にその内容を明らかにしないまま悪法を次々に成立させている。

6月にあけび書房より出版された浅井春夫著「新自由主義と非福祉国家への道 社会福祉基礎構造改革のねらいとゆくえ」は、この間の政府の社会保障構造改革路線をていねいに説き明かしている。政府・財界がねらう介護保険・高齢者医療制度・年金制度の総合的「改革」について、「根本を学ぶ絶好のテキスト」として是非ご活用いただければと思う。

本書は、社会福祉基礎構造改革がわが国を非福祉国家へ変質させる「改革」であり、その背景である新自由主義＝新古典派経済学の理念と考え方、具体

的な政策の表れ方について批判的に検討している。主な内容を紹介する。

第1章「社会福祉をどうとらえるか」では、戦後の社会福祉の到達点と考え方について基本的な視点で提示している。第2章「新自由主義の福祉政策とはなにか」は、新自由主義の理論の問題点とその具体的展開をアメリカの例等で紹介している。第3章「介護保険と福祉のビジネス化」では、介護保険と高齢者福祉政策が「買う福祉」への大転換を図っていることを実際の経緯のなかで論述している。第4章「社会福祉法はなにをどう変えるのか」では、6月に施行された「社会福祉法」の名称変更の意味していること、具体的な法律「改正」の問題点、市場原理の本質、そして今後の運動上の課題にふれている。そして第5章「新自由主義と社会福祉実践のゆくえ」では、直接入所契約制度、支援費支給システム、市場原理の導入がいかに社会福祉実践をゆがめ、非人間化していくことになるかを問題提起している。資料も参照できる内容となっている。

(あけび書房 1400円)

(石川芳子・いしかわ よしこ・全労連国民運動局次長)

細川 汀著

「かけがえのない生命よ」

～労災職業病・日本縦断～

「働く者のいのちと健康を守る全国センター」を結成する上で山田信也先生、渡部真也先生と共に大きな役割を果たしていただいた細川汀先生とは、著書や論文などを拝見したり、電話で話したことはありましたが、今年の9月まで一度もお会いできませんでした。初めて京都で行なった全国センターの「VDT作業基準検討プロジェクト」に西山勝夫先生と共に病を押して参加して下さった細川先生は、これまでの業績や初対面を感じさせない、参加メンバーと同じ仲間と言った感じで適格な助言をして下さいました。

細川先生の最近の著書「かけがえのない生命よ」(労災職業病・日本縦断)を読ませてもらい、改めて先生の労働者・働く者への深い愛情と信頼、働く者の「かけがえのない生命」をないがしろにする経営

者や政府に対する怒り、そして働く者と一緒に研究し闘ってこられた強さとロマンを感じさせられました。

最近の「東海村臨海事故」「JRコンクリート塊落下事故」から始まる本書では、1960年代の炭鉱などでの大事故の教訓が生かされていない点への鋭い批判など、現在の問題と対比しながらこれまで先生が取り組んでこられた課題との共通する教訓や課題を明らかにされています。また、副題の「労災職業病・日本縦断」にも現されているように、学生時代の京都から始まり大阪、四国、東北、北海道、中国、九州など、文字通り「日本縦断」して、現場に行き、労働者と一緒に調査・分析し、政策化してきた各地の足跡が記されています。

同時に本書は、労災・職業病のわかり易いガイドンス本にもなっています。

頸肩腕障害、腰痛、白ろう病、じん肺、VDT作業による健康障害、振動病、チェッカー病、過労死などの解説と共に、タクシー、看護婦、山林労働者、教師、電気労働者、電話交換手、保母、鉱山、化学工場などの職業・職場と職業病、労働災害との関わりが解明されていますが、とりわけ頸肩腕障害、「保母病」「電話交換手病」の部分に多くのページが割かれ、運動面の教訓も示されています。

九州電力労働者の健康障害調査の時、「コンクリートの電柱に10メートル登ってみたらすごい風だ。足がふるえてきてどうにもならなくなって途中から降りてしまった」には驚かされましたが、国鉄労働者の健康と職場を調査するため、自ら機関庫やトンネルに出かけ、タクシー、保母、電話交換手などたえず職場、現場に行き、直接見て(診て)、聞いて、体験して調査・分析し、労働者と一緒に政策、要求をつくり、運動してきた細川先生の生き方を通して私たちへの熱いメッセージが伝わってきます。

(池田 寛・いけだ ひろし全労連・企画局長、働くもののいのちと健康を守る全国センター・事務局長)